

(三十五 情女離魂) 五祀が備へ向ひた。

情女離魂の 魂和(真夜) 月和 何如何(即色)か ！ ！ ！
雲魂は

この向迄と為へて雲相と悟り後を知らず

肉 信の ~~聲~~ に出て 詠い入る こ 旅舎に宿する如きも

のどあることと知る 此はかほつきり判ら ず 行 けり

素りに行利る (乳を) 喜れ。 暮るるとして地中

火風 ~~大~~ の 大 (四角素) が逆折する 死に臨んぬ

湯の指をん 標の 標い 手足と七弦八倒とせたと 向い合は

ぬ。 その時になつて 是は 何れも ~~道~~ 道つて

れなかつたと言ふ事

行方へ行こも

雨の夜に...

~~...~~

谷や山が笑うたけだ。

清女は一人の二人のりか。
(以上公家大書)

めいはいい
是れ一か、是れ二か。

娘は親の決り
を嫌つて愛人と

五年経つ
宙に伴われ
の乳

師つる妻は
所がの乳は
借女が居る

年物云は病の
床に臥つた
宙

小島の借女が
下りた
借女が

まつて出て
二人の借女が
合信した

後新詠
新灯籠
和

笛軒がある
新燈籠
の乳

この借女奇譚は相当に眉唾の
道徳的
抱れ子...
仲村仙譚が...
心霊の語りか...
試せてある。

新詠日

根拠として

そこの発信するものは肉作

に人子ほ電を放しなさい、また全ま肉

信から発したものでない重級をけがらなく

と堂了色字海 に発せしなり しかり する如きはあり

電波 テレ ビヤウゲオの電波 電 必ず 電 信局から放送

され、発信の電波は存在しなさい。 人の思念は

生ける人子の肉信 生 物めを精巧な 生

思念の発信装置であつて、 此 肉信と云ふ

肉信 肉 信 信 通 通 ちりければ思念は発現する事がない

出電 出 電 電 が 有 り な さい。 出 電 電 が 有 り な さい



こ「情女未離」の「も望れ万福なり、情女已」

魂のニも望れ万福なり、
胡村化して
其心は折
と云くもの

~~今日のような電話、電線、磁石、に因る科此の存在しなかつ~~

今日のような電話、電線、磁石、に因る科此の存在しなかつ

かつの「世の心算（神算）巨量」

「世の心算（神算）巨量」

「世の心算（神算）巨量」

「世の心算（神算）巨量」

「世の心算（神算）巨量」

「世の心算（神算）巨量」

「世の心算（神算）巨量」

世の、法は甚の物語で、うつかり路上で人
 に会つた、いふ事があるが、云はば、さうしてその
 である。その公案は「^櫻櫻華^櫻」と云ふ。これに
 も「^櫻櫻^櫻」とある。雷峰は「^櫻櫻^櫻」と云ふ。これに
 つきりしと云ふ。へである。

だが更に一言添へよう。禪は此の如きで、^櫻櫻^櫻は
 禪をけしめ、世の、その宗教は此の如きで、^櫻櫻^櫻は

微笑の境域は人の習性が到達し得る極限である。宗教は此の山の
 頂上に登る向上の道である。その向上の極限は、それから先は
 神道布斗麻辻の道がある。それはその山上から人の性徳の宗理である
 摩訶を道しるべしと、降りた道を降る事と、地上の万物を創造し、
 在りて極極する降り道である。向下の道である。これと天降降院の
 道と云ふ。向上の道は世の、隨所の南である。だが向下の正道正法は神道
 三種の神皇の道^{と云ふ}である。

(三十七) 庭前(栢樹) 趙州の或時信和尚の

在。幸慶が~~仰~~仰はから来在する意義如何。

州が云つた。庭前の栢樹子。一一一若し趙州

が答へた所を款却に見後するならば、~~過去に~~釈

加~~仰~~仰くことなく、末まに彌勒~~仰~~仰くことなく、只今此処に生ける

佛と~~仰~~仰くことなく、栢樹子と云ふ~~仰~~仰かあるのみである。一一一一一趙州

の言葉は~~仰~~仰事象~~仰~~仰(展)べこなるので

は~~仰~~仰る~~仰~~仰ある~~仰~~仰此れは趙州の心持(機)を~~仰~~仰べこ

ぬるのである。言葉の表面だけ~~仰~~仰る~~仰~~仰物

は生命と云い、字句に拘泥する者は迷ふ。(以上公案大意)

言葉の電の表現であり、道の表詮である。

聖と通んじ後の岸の流すのの神道で言葉と

天の鳥船と云ふ。言葉の霊は電と云ふ。言

の電の軌範が道である。故に言葉と云ふ。言

電が一つにたつたものである。瑞州の言葉の

はその言葉のよつと示された電の言葉の

これと愛取らなければならぬ。

祝師西条の意、遠慮が即ちから候と云は

の何かと云ふ事である。この曲に在る

州は庭の指し答へた。この事には

に眼を放つてはこれなよと桐樹子と指した。

